

Title	序：封建社会的なものと市民社会的なもの
Author(s)	大木, 英夫
Citation	聖学院大学総合研究所紀要, No.10, 1997.2 : 3-4
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=3024
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

序——封建社会的なものと市民社会的なもの

所長 大木英夫

北朝鮮労働党の黄書記の亡命事件は、朝鮮半島の地殻変動の序曲かも知れない。黄氏が北朝鮮の実体を、社会主義ではなく、封建主義であると言ったことは、資本主義と社会主義という対立図式の破産の最後の宣告のようなものと言えるかも知れない。資本主義と社会主義の対立図式によって二〇世紀の知識人の知的乱視は嵩じ、現実の把握を歪めてきた。社会主義という名のリアリズムは、中世的リアリズム（觀念の實在のリアリズム）のごとく知識人の觀念の中で実在化し、社会的現実にとってそれは単なるノミナリズム（唯名論）に浮上していることを自覚できなかった。社会主義の「名」のもとにある「現実」は、封建主義であつたというのである。奇妙な事態である。

この北朝鮮の「現実」を見抜いていたのは、聖学院大学の鐸木昌之助教授であつた。鐸木氏は、聖学院大学総合研究所のデモクラシー研究の一環として北朝鮮を分析し、この実体を明らかにした。（聖学院大学総合研究所紀要五号参照）。すでにNHKの「クローズアップ現代」や朝日新聞で氏の活躍は始まっているが、本研究所におけるデモクラシー研究の実績もまたその意義をやがて認められるようになるであらう。

近頃「市民社会」という言葉が学界のみならず、財界でも語られるようになった。故人となられた平田清明氏（四半

世紀も昔になるがわたしは同氏の依頼によって名古屋大学大学院で連続講義をしたことがあった）は、「市民社会と人格的自由という基本原理が社会主義の前提条件となる」という思想の持主であられた。本研究所に平田氏の後継者八木紀一郎教授（京大）を招いて研究発表をうかがった（一九九六年一〇月二二日）。その際平田氏の遺著（八木氏と大町氏の編集になる）『市民社会思想の古典と現代』という書を頂いた。われわれはずっと「市民社会と人格的自由という基本原理」の方に関心をもってきた。黄書記は、社会主義と資本主義ではなく、封建主義と資本主義の対立だと言うが、むしろ、封建社会的なものと市民社会的なものと対立という方がよいのではないか。これが日本をも含めて、東アジアの根本問題であろう。近頃デモクラシー論が盛んである。「思想」は一九九六年九月「ラディカル・デモクラシー」の特集、「世界」一九九七年一月号はアジアにおけるデモクラシーと人権の問題をとりあげ、著書では最近佐伯啓思京大教授が『現代民主主義の病理——戦後日本をどう見るか』（NHKブックス）などがある。これまでのデモクラシー論で、果して二〇世紀を通じて隠蔽されていた「現実」を取り出し、取り組むことができるだろうか。ともかく、聖学院大学総合研究所が、その現実を直視し、そこにある問題と取り組んできたことは、すでに一個の歴史的事実となりつつあるのである。

一九九七年二月